アホ以上バカ未満の誕生日。

3007

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
アホ以上バカ未満の誕生日。

【Ｎコード】
Ｎ８７３６Ｅ

【作者名】
３００７

【あらすじ】
アホの青春はとても語るにはつまらなく味気の無い物だった。

ガキの頃からアホな事ばっかりやっていた。
アホな事といっても薬物や殺人など、今のバカがやる様な事ではなく単純に自分が強い人間だと勘違いしていた。
ルートや因数分解を覚える前からタバコと酒を覚えて。周りが大人の階段を登っている中で1人バイクに跨っていた。
この二進数で物事を解決する時代には古臭さを感じる様な不良だった。

もちろん周りは自分を軽蔑していた。
しかし、あの時の自分にはそれが快感とも感じていた。
いつも偉そうにしている奴が自分を前にすると黙り込む。この快感が何とも言えなかった。
周りが自分を避ける度に自分が優位に立っていると感じていた。
力が全てだと思っていたあの頃。自分の前に立つ者は全て蹴散らしていた。この考えに老若男女関係無かった。
正義ぶった大人が自分に説教をしようとしたのであれば、それはもう敵と見なした。

世間から見放された強がり集団。このアホ達が住む世界には面倒なルールが無かった。
『力がある者がトップに立つ』この単純な物を知り尽くしただけで、自分は世間の全てを理解したと勘違いしていた。
いやっ。自分はこの単純な物でさえ理解出来ていなかった。
単純な力の中には友情、正義、信頼、根性、言葉で表せない様々な物。その全てが力だった。
しかし、自分は己の力だけを信じていた。こんな自分はとうとう誰にも相手にされなくなった。

毎日の様にしていた喧嘩。それも月日が経つにつれて自分には無い力を使われて、いつしか弱い立場になっていた。
最初に気付いた時に理解すれば良かったもの、自分の力だけを信じていた自分には仲間を作る力は無かった。そして、気付けば自分は隠れながら一人でポツリと座っているへたれになっていた。

ジャングルで大の字になり一人で寝ていた自分。その快感を覚えた時には、それは嬉しかった。
しかし、孤独の本当の意味を知った時、その時は涙が止まらなかった。
気付けば一人で歩く道。前までは漫画の様に周りが開けてくれた道も今では一人、端の方を小さくなって歩く。その光景を鏡で見るたびに自分の顔が崩れていった。
全ての人間から見捨てられた自分。しかし、心の奥底では自分を強い存在だと感じていた弱虫な自分。
孤独を味わう筈なのに、惨めさを感じるだけなのに、自分を変える気は無かった。
いやっ、変えれなかったのだろう。

そして、１９の時。
何とか仕事には就く事が出来ていた。仕事といっても、そこら辺のフリーターと変わらない収入しか無かった。
そして、この頃になると昔の自分を恥じるかの様に思い出していた。

最初は些細な事だった。
まだ、自分が無邪気に笑っていた頃、運悪く自分の周りにはアホばかりだった。
何に影響されたか分からないが、小学校からパッパラパーな髪をして、口癖の様に喧嘩、喧嘩と叫んでいたアホ。
最初こそ一人だったものの、そいつの行動、周りの困った表情、な

によりそいつを見る女子の視線。それはガキの頃の男達には羨ましいの一言だった。
そして、気付けば自分の周りの男の大半が調子づいていた。男子がそうなると次は女子もアホへと変わっていった。
周りの大人も最初は小学生の遊び事と目を瞑っていた。しかし、ガキの自分達には限度という物を知らなかった。
ある時、親のをパックたのか学校にタバコを持ってきた奴が居た。それは大事になった。そいつは自分達に自慢げにタバコを見せびらかした。それで気分を良くして、そいつは授業中、親の見よう見真似でタバコをふかした。それを見た先生はマジギレ。緊急の集会。親が次々と呼ばれた。そして、次の日にはクラスの大半が元に戻った。
しかし、不良の味をしめた8名はアホのままで居た。こうなると、たちが悪い。見事なぐらいに調子こき、順調に下へと転がり落ちていった。もちろん、その8名に自分も入っていた。

12歳の夏。
この頃になると、周りも相手にしなくなった。
それにつれて、最初こそ結束の様に固まっていた8人も仲間同士で分裂したり、メンバーが脱退したりと色々あり少しずつアホの間柄も微妙な感じになっていき、卒業する頃には全員が普通の小学生として卒業していった。
しかし、自分だけは何も変わらずにいた。
卒業式の全体集合写真に一人だけ上の方で無邪気に笑っている。自分は夏休みが終わると同時に学校に行くのを止めた。
「学校何て行ってらんねぇ」今では思い出す度に顔が赤面するセリフだが、あの頃はアホの一つ覚えに言っていた。
自分の親も最初こそ鬱陶しかったが、1ヶ月も経たない内に諦めた。親も小学校という事で大目に見ていたのだろう。

そして、中学校の入学式。
自分は、髪はパッパラパー、手にはジャラジャラ、顔はギンギラ。
この格好で入学式を迎えた。親も中学校で自分を更生させ様と考えていたのか、この格好での登校を半ば認めていた。
もちろん、即効先生には目を付けられ、同級生が午前で帰る中で自分と親は午後までみっちり残された。
しかし、先生に目を付けられるだけじゃなく、もっと鬱陶しい先輩方にも目を付けられた。

入学式を終え、初めての学校。
さすがに親も入学式の格好では行かせず、軽くではあるが抑えた。
しかし、充分に王様の機嫌を損ねる身だしなみであった。
教室に着く前に待っていた家来共に連れて行かれ即刻王様の前へと通された。
王様の尋問が始まった。

「お前調子のんなや」

この一言に対し自分が言った反論

「あぁ、ていうかお前に関係ないし」

即刻有罪と決まった。もし、あの時の自分が上下関係を分かっていたら、今でも鮮明に思い出せるぐらいの傷を心に残す事は無かっただろう。そして、次の日から俺は王様の家来として学校に行く事になった。しかし、心の何処かでは復習劇を練っていた。この復讐劇の相手役は8人のアホだった。

そして、舞台当日。
自分は王様のお陰で喧嘩の腕はかなりのものへと上達していた。正直、自分でいうのもアレだが、そこら辺の良く分からないタトゥを入れているプロより自分は上だと感じている。
もちろん、ここに居る家来7名、王様1目名が襲い掛かっても勝てる腕前である事は確かだ。そして、先輩達が後輩と男涙を流している中でとうとう舞台の幕が上がった。
自分は威勢よく王様に跳びかかると、案の定家来が飛び掛かった。しかし、予想通り自分の力に勝つ事は出来なかった。その後は殴った、蹴った、掴んだ、投げた、この繰り返し。時間こそ分からないが、最終的には先生が止めにはいり、警察が飛んできて幕が閉じた。この舞台の悲劇のお相手役と止めに入った先生、計１０人が病院贈りという予想以上の反響で自分の復讐劇は終わった。
舞台の上は血、歯、悶えこむ人間数名、その光景を優雅に見ている自分。そして舞台終了後、白くて紅く光る車に迎えられて自分は舞台を後にした。

中2の夏。
復讐劇が閉幕した後、自分が王様となった。
王様と言っても、別に周りが尊敬している訳じゃなかった。ただ単に強い者にこびり付く連中が数名居ただけだった。だが、あの王様の家来達もこんな感じだったのだろう。
それにしても、自分はこの王様の位置が鬱陶しかった。
周りが自分を見る目は小学校の時に感じた優越感と一緒で良かったが、それ以上に良く分からん連中がトラブルを起こした責任を取ったり、何かあるとまず肩を叩かれたのは自分だった。この感じがどうも好きになれなかった。
別に王様になりたくてアホになった訳じゃない。単純に周りが規律を守ってる中で自分だけ道を外れてる感じが心地よかっただけだっ

た。
そんな中2の夏休み。自分は毎日の様にアホが集まる場所へと足を運んだ。
別にここには何も無い。ただ、アホが自分の存在をアピールするが如く、ワーギャー騒いでいるだけ。それ以外は潰れた店と迷い込んだ猫が居るだけ。他には何も無い。
ただ、周りは自分を強い存在だと勘違いしていたんだろう、ここに来るといつも以上に周りがペコペコと頭を下げる。この感じが何とも言えなく毎日の様に通っていた。しかし、ここにも鬱陶しさがあった。
変な集団の小競り合いに参加させられたり、アホ達の間で変な薬が出回った時には精神崩壊する程、警察に会っていた。しかし、その現状に甘汁を飲んでいる自分が居た。

そんな自分に天罰が落ちた。
月日が経つにつれて、周りから変な噂が立つ様になった。最初は熊を倒したなど、冗談半分の内容だったが時間が経つにつれて内容は過激になっていき、最終的には警察が飛び出す様な内容に変わった。その噂は烈火の如く広がり最後は本当に警察が飛び出して、家宅捜索までへと広がった。
ここまでの大騒ぎになると、思春期の思い出作りでは済まされない事になった。
学校、教育委員会、もちろん家族と自分に関係している全ての人々を何らかの形で困らせた。
今思えば、最初にこの噂を聞いた時にちゃんと否定していればここまで大事にはならなかったのだろう。しかし、自分はやんわりとしか否定しなかった。どちらかと言うと、自ら濁し濁しで噂を広めていた感じもあった。
そんな事をしているとあの集団も黙っていなかった。

警察が家に来た次の日の朝。
朝の８時とういのに玄関には派手な装いをした馬車が何十台と停まっていた。
その馬車にはこれまた派手な旗を持った人や野球帰りなのかバットを持った人など、ユニークな面々がイライラした面立ちで今か今かと待っていた。
この光景を見た自分は真っ先に玄関へと向かった。母親は出かける自分を止めたが、それを追いはけて自分は馬車へと乗り込んだ。そして、半そで半ズボン姿でパーティー会場へと向かった。
いつもなら乗り物酔い何てしないが、さすが上等な馬車だ。見る見る内に具合が悪くなり、武者震いが止まらなくなった。そして、あっというまに会場に着いた。
そこにはヤニで汚れた壁一面に張られているポスターと無造作に落ちているタバコの吸殻、ビールの空き缶。それこそ、不良漫画に出てくる様な小屋だった。この世に地獄があるのならここが一番近い存在なのだろう。

そんな事より、この地獄に来たという事は少なくても自分にとって負になる事が起きるのは目に見えている。
幾ら喧嘩が強いといっても所詮ガキのお遊び程度だ。ここに居る人達は言わば喧嘩のプロの様な人ばかり、しかも何十人という数。
アマチュア１人対プロ何十人。勝敗は見えている。自分は神が味方に付くのをただ祈った。

自分は震えた足を誤魔化しながらトップの前へと立った。
アホの世界のトップ。それは噂では耳にしていた。色々と語られており、全ての噂に嘘くささがあったが何故か否定出来ない。そんなカリスマ的な感じが話から想像出来ていた。
会ってみたら尚更だった。例え自分がマシンガンを装備していても、勝てないのが分かった。

そんなカリスマ的トップが自分に声を掛けた。

「お前、偽者だろ」

短い一言だった。しかし、自分には全てが分かった。
そして、この人がトップになれた理由も少し理解できた気がした。

「偽者なら、もうあそこには来ない方が良い。腕力だけで歩ける程、あそこは単純な世界ではない」

この一言を言うと、自分は又、馬車に乗せられた。何故だか、この結末に安心している自分が悔しく感じた。
そんな事を考えた帰り道は異常に険しく、長く感じた。

家に着くと、親が飛び出して来て自分を迎えた。
しかし、今の自分に親のありがたみを理解する気力は無かった。
心配する親を押しのけて部屋のベッドに直行した。そこからは親が何度か心配して、部屋の前に来たが無視をし続けた。
反抗するのが今の自分が出来る精一杯の親孝行だった。

そして、朝目覚めると自分は真っ先にいつもの場所へと足を運んだ。
そこには、アホが自分の存在をアピールするが如く、ワーギャー騒いでいるだけ。それ以外は潰れた店と迷い込んだ猫が居るだけ。
ただ、自分の居場所だけは無くなっていた。トップが言った偽者という言葉。それをきちんと理解したのは、この光景を見た時だった。
周りは次々と豪華な馬車に乗り、きらびやかな衣装を纏い、楽しそうにここへと足を運んでいた。
後から風の噂で聞いたが、自分の事件があってからトップがガキの教育にも力を入れたらしい。

そして、その光景を見た自分は早々と陰へと姿を消した。
この陰の世界には、まともな人間は居ない。ここに居る奴は薬の力で廃人となるか酒の力で溺れるかの二つに分かれている。
この世界に居る住人も自分と同じ偽者なのか。そんな事を考えていると自分の肩を叩いてくるゴキブリがウジャウジャと湧いてきた。
そしてゴキブリは次々と現れ俺の耳元で囁いていく。

「兄ちゃん、雑魚の顔になってるぞ。どうだ、一万だぜ」

「表の世界での噂は聞いてるぜ。どうだ、一万だぞ」

「ほら、この薬を飲むと喧嘩が強くなるぞ。一万でどうだ」

「おう、初めて見る人には安くするよ。一万でどうだ」

「ここに来たら仲間だ。一万で譲るよ」

「大丈夫だ。これを飲んだら元に戻れる。一万でやるよ」

「安心しな。これは、そこらの連中と違って体に害はない。一万で譲るぞ」

「ハァー、スゥー、お前を助しゅけりゅ薬だ、一万でやるよ。」

ここのゴキブリは本当に強い、叩いても叩いても必死に足にしがみついてくる。
そして、叩く度に姿は廃人へと変わっていった。
人間が訪れていけないと言われてる四次元世界。この世界を絵で表すとしたら自分はこの光景を書くだろう。そして、自分もいつかこのゴキブリと同じ世界へと逝くのだろうか。そんな事を考えていた

１４歳の夏休み。

自分が産まれてから早２４年と３６５日。
中卒、資格無しの自分にしては裕福な生活を出来ていると感じている。
そして、今日で２５歳。あのアホな時間の全てを泥団子だと感じる度に自分も歳を取ったと感じる。
あの時には分からなかった親のありがたみ。特別に会いに行ったりはしないが連絡ぐらいは取るようにしている。そして、毎回の様に言われるガキの頃の話。それにむきになる自分にまだまだガキだと感じる。

そして、今日は久しぶりにアホの世界へと足を運んだ。
昔の様にアホのひとつ覚えに騒いでるアホ達は居なかった。居るのは迷いこんだ猫だけだった。年月が経つ度に此処は警察の大注目スポットとなり、次々とアホ達は移住したそうだ。
そして、久しぶりに何時もの階段へと腰を下ろした。
今ではアホの世界で自分の名前を知っている奴は居ないのだろう。
それは携帯の履歴を見る度に感じる。
喧嘩の世界でトップだった自分。否、喧嘩の世界で最弱だった自分。
いずれにしても自分が生きてきた少なく味の無い人生は誰も語る事

のないつまらない物だろう。
自分は何故この世界で生きようとしたのか、ここで生きれない事は自分が一番知っていた筈、そんな事を気付けなかった自分はアホだったのだと改めて感じた。

階段から腰を上げ景色を見渡した。
あたり一面には喧嘩の名残とアホが残した傷跡が少なからず残っていた。そして、見たくも無い景色もそこにはあった。
しかし、この景色の中にも周りを輝かせる太陽と青空は綺麗な物だった。
そして、アホの世界から帰ってきた自分はいつもと変わらない休日を過ごした。
一人でゴロゴロして、適当にテレビを見る。見事なぐらいに太陽や青空と間逆な生活だが、その生活でも自分は満足をしている。

そして、夜の7時５０分。
自分は冷蔵庫からケーキを出し、一人きりであるが少し豪華な料理を並べ、自分が生まれた時、８月８日の夜８時を待った。
そして、7時５９分。ろうそく変わりにタバコに火を付けると少しだけだが照れくさく感じた。
そして、８月８日の夜８時。自分はケーキを一口だけ食べた。
２５歳になって初めて食べた味はちょっと食べたら飽きる程、とてつもなく甘かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8736e/

アホ以上バカ未満の誕生日。

2010年10月28日08時15分発行